

## 吃音のある子どもの自己肯定感を支えるためには

### 【研究を行った背景】

吃音については、未だ原因も、確実に症状を改善する方法も見いだされていません。結果的に症状が消失する場合もありますが、生涯にわたり消失しない場合も多く、その予測も困難です。また、滑らかに話すことのできない不便さだけでなく、話すことへの不安、人への恐怖、自己否定といった、吃音があることによって生じる深刻な問題を抱えることも、さらにはそれが人生を左右する問題につながることも少なくありません。

このような現状から、吃音の原因解明や治療法開発に向けての研究が進められる一方で、生涯にわたり症状が消失しないことも視野に入れ、吃音のある子どもが、吃音に翻弄され続けなくて上手く吃音と向き合い、自己に対する肯定的な捉えを育てていくための教育のあり方を追究していくことも求められています。そこで、吃音のある子どもの指導・支援の場の一つである「ことばの教室」ではどのようなことができるのか、その視点・内容・方法を検討しました。

### 【研究結果】

吃音のある子どもの自己肯定感を支える視点として次のことが整理されました。

- 子どもが吃音と上手く折り合い、吃音・自己を肯定していくためには、教師の吃音への向き合い方が問われること。教師が吃音を避けず、吃音をいけないことと捉えず、子どもとともに吃音と向き合うこと。
- 教師と子どもの間で吃音のことが話題にできること、語れること。
- 教師と子どもの共感性を育む実践が重要であること。
- 吃音に起因する問題は、吃音や自己について知る、学ぶことで変えていくことができること。子どもが吃音や自己について主体的に学んでいけるような支援が重要であること。
- 吃音のある子ども同士の出会い、語り合いが重要であること。
- 子どもが周囲から認められる、周囲に役立つと実感できる経験が重要であること。
- 保護者や周囲に対して、吃音についての理解を拡げていくこと。



### 【研究結果からの提言】

吃音のある子どもの自己肯定感を支える実践として次のような内容・方法が考えられます。

- 子どもと教師が何か同じ事柄に夢中で取り組めるような実践（ゲーム、制作活動、等）。
- 子どもと教師が吃音について語る実践（吃音のある日常を語る、ことば遊びやゲームを通して語る、日常場面の対策として語る、他人の悩み相談として語る、絵本・読み物等の教材を利用して語る、等）。
- 吃音のある子ども同士が一緒に取り組む実践（様々な内容の話し合い、相互の困りごとの相談・対策会議、演劇、等）。
- 吃音について学ぶ実践（吃音に関する一般的知識を学ぶ、音読・発声等を通して自己の吃音の特徴を学ぶ、等）。
- 成人吃音者等から学ぶ実践（様々な吃音者と出会う、知り合う、体験談を聞く、等）。

### 【研究結果の効果・効用】

#### ◆教師（学校教育）にとって

近年、吃音症状の改善に向けた取り組みだけでなく、吃音のある子どもが自己の吃音と上手く向き合い、肯定的な自己感を育てていくことの重要性は指摘されてきたところですが、指導・支援の具体的な方法・内容は模索状態でした。この研究によって、吃音のある子どもの自己肯定感を支えていくための視点、具体的な実践内容・方法、授業展開例を提示することができ、ことばの教室等での実践に役立ちます。

また、当事者団体等、学校外における取り組みの内容からも実践のヒントを得ることができるほか、当事者団体との連携を図る上でも役立ちます。

さらに、吃音のある子どもばかりでなく、発達障害をはじめ他の障害のある子どもの指導・支援においても、自分自身を知る実践等、知見・成果の応用が可能です。

#### ◆子ども・保護者（家庭）にとって

吃音のある子ども自身が（あるいは吃音のある子どもの保護者が）、吃音と上手くつきあっていくための知見を得ることができます。また、吃音に対する様々な考え方、様々な吃音者の思いに触れ、自己の（我が子の）吃音に対する向き合い方を考えていく上で役立ちます。

## 【研究成果の活用】

### ◆教育実践のガイドとして！

吃音のある子どもの自己肯定感を支えるための具体的な実践ガイドとして活用できます。

### ◆理解啓発のツールとして！

吃音のある子どもの周囲の人々に、吃音を理解していただくためのツールとして活用できます。

### ◆吃音をめぐる諸問題を学ぶ参考書として！

吃音問題の本質、吃音のある人の自己意識、ことばの教室等についての知見を得る参考書として活用できます。

### ◆吃音のある人の思いに触れる資料として！

吃音者の様々なことばに触れることができ、吃音のある人の思い、生き方を知る資料として活用できます。

### ★研究報告書には、次のような成人吃音者のことばが掲載されています。

- ・吃音は自分に与えられた良質のテーマである。 ・吃音のおかげで人や本など貴重な出会いが多くあった。
- ・吃音は自分の全てではないが、大切な一部分である。 ・弱いと思っていた部分が自分らしさを磨いてくれている。
- ・吃音があったから、いろいろな周囲の物事や人の気持ちに気づくことができた。
- ・吃音は日々取り組まざるをえない問題で、他の問題の対処の仕方も学ぶことができた。

## 【関連情報】

### ◆吃音ミニ知識

- ・原因は現在のところわかっていません。連発（繰り返し）、伸発（引き伸ばし）、難発（音がつまって出ない）等の言語症状がありますが、器質的に明確な根拠は認められません。
- ・人口の約1%といわれ、女性よりも男性に多いこともわかっています。
- ・吃音のある人の多くは幼児期（2～5才頃）に発吃しています。
- ・症状には「波」があり、吃音の症状が目立つときと目立たないときがあります。
- ・話すときに動作が伴うこともあります。
- ・人と一緒に話す、音を聞きながら話す、いつもと違った声や話し方で話す、等々のときに症状が減少することがあります。
- ・特定の苦手な音や場面がある人が多くいます。
- ・出しにくい音を避けて別のことばに置き換えて話したり、それによって本当に言いたいことが言えなかったりすることもあります。

### ◆当事者団体等の活動

吃音当事者の自助団体、研究団体、ことばの教室担当者有志の会等で、吃音のある子どもや保護者、成人吃音者が集う場をもっているところもあります。

仲間との出会い、語らいが、吃音と上手につきあっていく原動力となっています。

## ＜参考ホームページ＞

- ・全国言友会連絡協議会  
<http://www.2m.biglobe.ne.jp/~genyukai/>
- ・日本吃音臨床研究会  
<http://www.bekkoame.ne.jp/ichioaki/>

本リーフレットは、研究所で行った次の研究を基に作成しています。

## 【研究課題名】

言語に障害のある子どもへの教育的支援に関する研究  
－吃音のある子どもの自己肯定感形成を中心に－  
(平成16年度～平成18年度)

## 【研究代表者名／問い合わせ先】

研究代表者：牧野 泰美  
(メールアドレス makino@nise.go.jp)  
研究分担者 松村 勲由  
後上 鐵夫  
伊藤 由美

## 【研究成果報告書】

「吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために」

### 目次

- ・まえがき
- ・研究組織
- ・第1章 はじめに
- ・第2章 研究の枠組みと論点
- ・第3章 基礎的知見を踏まえて
- ・第4章 ことばの教室における指導・支援の現状
- ・第5章 ことばの教室からの実践報告とその検討
- ・第6章 教材開発とそれを用いた実践
- ・第7章 学校・教室以外の場における取り組み
- ・第8章 おわりに
- ・資料 吃音教育セミナー報告
- ・あとがき